陳舜臣さんを語る会通信

NO.76　Jul.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年7月20日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

長編推理小説 最後期の一作『燃える水柱』 / 陳舜臣さんの再度山登山

本号では、前半、『燃える水柱』(1978 徳間書店、初出は『問題小説』78年6、7、8、9月号)を取り上げます。後半では、陳舜臣さんの再度山登山について記述いたします。　(編集委員　橘雄三)

『燃える水柱』導入

一九三八年七月五日の神戸大水害から話ははじまる。このとき、特に、布引の麓一帯の山津波はすさまじかった。張範訓は、「すうーつと、大空めがけて駆けのぼる真っ白な水柱を見た」という。どうもこれは、張範訓の白昼夢であったようだが。

そしてこの日、一つの殺人事件が起っていた。

一九六七年の梅雨明けのころにも豪雨があった。そのころ「私」は山本通に住んでいた。坂道をはいった路地にあった家で、そのあたりは高くなっていたので大きな被害はなかった。その日、「私」は、知り合いの新聞記者中沼康平からの電話で、有力華僑・陸元南の死を知る。陸元南の死は、二十九年前の未解決殺人事件を思い起こさせることとなる。

そして、三つ目、発生順では二つ目の殺人事件が明らかになる。一九四三年、場所は香港。一九三八年の殺人事件を捜査した特高の刑事、沢田修が殺される。

これら三つの殺人事件に関連はあるのかないのか…。

温家の美人姉妹の姉・昭媛と夫・陸伸年、昭媛の異母兄・温光雄とそのグループ、退役軍人で「怪物」と呼ばれた吉村延治のグループ、特高の刑事沢田修らが絡みストーリーは展開する。泥沼化する日中戦争と軍国主義の時代に塗りこめられた青春群像を鮮やかに描く長編推理ロマン。

主な登場人物紹介

●私　年齢、生い立ち、住所、職業ほか生活環境、人生経歴など、ほぼ陳舜臣さん

●張範訓(ちょうはんくん)　「私」より五つ年長。神戸生まれの華僑二世

●陸元南(りくげんなん)　広東出身の富豪、戦前の有力神戸華僑。「裕栄洋行」経営。昭和十八年に帰国し、三十年、神戸に戻る。この間十二年、神戸に不在

●潤琴(じゅんきん)　陸家のお手伝い。アメリカから来ている

●陸伸年(りくしんねん)　父は陸元南。温昭媛の夫

●温有仁(おんゆうじん)　広東出身。「同順源」経営

●温昭媛(おんしょうえん)　温有仁の娘。美人姉妹の姉。「私」より三つ年長。陸伸年と結婚

●温芙蓉(おんふよう)　美人姉妹の妹。「私」より二つ年少。夫は潘兆生(はんちょうせい)

●温光雄(おんこうゆう)　温家の美人姉妹の腹違いの兄。日本名、清水光雄(みつお)。小学校を卒業するころ温家に入る。

●黄大嘉(こうたいか)　温光雄が東京から連れてきた絵の友人。三十三歳

●文規同(ぶんきどう)　温光雄が東京から連れてきた絵の友人。二十歳くらい

●沈律英(しんりつえい)　温光雄が東京から連れてきた絵の友人。二十歳くらい

●沢田修　特高刑事

●中沼康平　C新聞神戸支局の記者

●竹中群次郎　六十二歳。C新聞を定年退職して既に七年。一九三八年の水害の時は三十三歳。黄大嘉事件について詳細なノートを残している

●吉村延治　陸軍で大将、大臣を約束されていたが、中将で退役。公然とはできない軍の裏仕事を担当、怪物と呼ばれた

●池沢康夫　竹中群次郎の中学時代の親友の兄。書画骨董の世界では一目置かれた鑑定家

徳間書店版表紙

『燃える水柱』廣済堂文庫版表紙

『燃える水柱』に気を取られたのは、移情閣が表紙に描かれているからです。私は移情閣を職場にしたことがあり、また、その曽ての主人・呉錦堂のことを調べたこともあり、移情閣がストーリーに絡んでいるのかなとの思いで読みました。しかし、期待は空振りでした。どうしてこの建物が表紙絵に使われているのでしょうか。いまだにわかりません。また、二人の女性は温家の美人姉妹(温昭媛と芙蓉)と思われますが、母子のように見えます。よく分からない表紙です。(橘)

徳間文庫版『燃える水柱』秋山駿氏の「解説」より抜粋転載

『燃える水柱』「解説」より抜粋転載
小見出し、傍線及び※は編集委員の加筆

生の状況に対して直立して起つ作家

あ、これは状況そのものが生みだした文学者だな、と、私はすぐ思った。今回、陳舜臣氏の小説を立てつづけに読んでの感想である。そして、そのことに私は新鮮な感動を覚えた。なぜなら、日本では、明治期の作家達を除けば、生の状況そのものが「作家の顔」になっているといった文学者、はなはだ寡(すくな)いからである。

作家にとってもっとも大切なものは、個性でもなければ、才能でもない。彼の生の状況に対して直立して起つ、ということである。これが作家の源泉である。個性や才能は、そこから派生するものだ。陳舜臣氏は、その源泉の感情を持続している。これはよほど精神の繊維の強い人に違いない。

状況そのものが生み出すとは、どういうことか。状況とはたとえば、陳氏が、日本の敗戦時の青年であり、また、在日中国人であるなどということだ。それがどんなに厄介な生の状況か、陳氏より数歳下の私の年齢の者までは漠然と感覚できる（私のように弱い人間は、そんな生の状況はごめんこうむりたい）。すると、読者はこう反問するに違いない。なんだ、それはその当時の生の一般的状況ではないか！そんな人は数え切れぬほどいるに違いない、と。なるほど、事実はそうに違いない。

自分は何者か？人生いかに生くべきか？

実は、私の言うこともその一点に掛けられている。事実は一般性だが、それを生の状況と化するためには、その人の内部に、自分は何者か、あるいは、人生いかに生くべきか、という問いが、熾烈に燃えていなければならない。陳氏はそれをした。彼は、生存の基本的な問いに賭けて、自分の周囲の事実を、生の状況として鮮烈に認識し、かつ、この生の状況に直立して起つという行為を、持ち続けている。これが陳氏の文学の源泉である。

こういう作家は、カインの徴しを額に持った者のように、絶えず走り続け、倒れるまで走り続けねばならない。彼は主題をもった作家であり、それは彼の生の主題である。だから、このタイプの作家は大きな仕事をする。

陳氏の文学は豊富で多面体

陳氏の文学は、豊富で、そして多面体だ。そして、そのすべては、彼の生の状況から発している。

第一に、推理小説がある。処女作『枯草の根』や、ここに収めた『燃える水柱』など。（陳氏の秀作『青玉獅子香炉』を、私はここに数えない。これは推理小説ではない。もっとぜんぜん違った文学ジャンルのものだ、と思う。）

第二に、自伝的小説とエッセイがある。自伝的な小説『青雲の軸』や、彼が愛惜する街を語った『神戸ものがたり』が、それである。

第三に、歴史小説とエッセイがある。小説『秘本三国志』『阿片戦争』や、エッセイ『実録アヘン戦争』『山河太平記』など。

第四に、日本と中国を対比しての文明批評がある。『日本語と中国語』『日本人と中国人』というような教養書がそれだ。乱暴だが、『中国近代の群像』などもここに入れさせてもらう。

もう一度繰り返す。これらは一見実に豊富複雑な作家活動の発揮と見えるけれども、その根は、まことに単純な一つのものに帰すということだ。根は、自分は何者か、いかに生くべきか、という一つの問いである。

『燃える水柱』は推理・自伝・歴史・文明批評を打って一丸とした、現代性を索める物語群

そして、実は、この『燃える水柱』を読み始めたとき、私は最初、これは推理物ではなく、（※『青雲の軸』など）自伝小説の続きなのかと錯覚したくらいである。なぜなら、主人公は、明らかに作者の陳氏自身であるし、彼の思い出とともに展開する戦前の生の断片は、ときに自伝小説より強いリアリティに輝いているからである。

そこで、私はとんでもないことを思い付いた。私は前言を翻し、これが、醇乎(じゅんこ)たる推理小説であるとする。すると、こんなタイプの推理小説、かつてどこに在っただろうか？つまり、作者の密度ある自伝的記述の間から、やがてゆっくりと「殺人事件」が出現してくる、といった推理小説が？これは新しいタイプの推理小説ではあるまいか。

もっとも、やはり私としてはこの作品を、推理・自伝・歴史・文明批評を打って一丸とした、現代性を索(もと)める物語群の一つとして考えたい。その魅力の一半は、歴史というものの生動にあり、もう一半は、温昭媛という卓抜な女性像の描出にある、と思う。

徳間文庫版表紙

陳舜臣さんが再度山に登ったのはCルートが多かった

本通信No.72で取り上げた『よそ者の目』「旅にしあれば」、前号の『六甲山心中』「ぼくらは逃げた」、本号の『燃える水柱』などなど、陳舜臣さんの再度山登山についてはいくつもの作品で記述されています。本通信でも、No.14、No.29、No.54、No.75など、何度かふれました。

ここでは、できるだけ新しい情報を紹介したいと思います。

Aは、ほぼ再度谷川に沿ったルート

【1.再度山への登山道】

空海は入唐の前と後、二度、大龍寺に参詣したと言われています。この時、登ったとされるのが大師道です。神戸武夷登山会の会員は、この大師道の途中にあった茶屋に署名簿を置き、登山を日課とし、現在に至っています。

【2.武夷登山会の登山コースの短縮】

神戸武夷登山会の長老で、会長も務められた詹永年(せんえいねん)さん(96歳)にお話をお聞きしました。要旨は次のとおりです。

現在、私たちの署名場所になっている燈籠茶屋と稲荷茶屋は、1938年7月5日の神戸大水害後に再建された茶店です。どちらも、この時の山津波で流され、場所も店名も変わって（元の場所からかなり下って）再建されました。

燈籠茶屋は、もと、中茶屋と言っていました。洪水後、7、8百メートル下がって、燈籠茶屋という名で今の位置に再建されました。建築中は、更に下、仮設で営業していました。

稲荷茶屋は、もと、ドック茶屋、天狗屋茶店、長谷茶屋などと、何度か名前が変わりました。記念の集合写真の場所表記が、同じ茶店前なのに(於)天狗屋茶店となっていたり、(於)長谷茶屋となっていたりするのはそのためです。場所は中茶屋よりもうすこし上でした。そして、山津波のあと、店名が稲荷茶屋と変わり、今の位置に再建されました。この再建には、登山会の会員も協力しました。

従って、燈籠茶屋、稲荷茶屋とも、今の場所・店名になったのは、山津波後のことです。

詹永年さんの生涯登山回数は１万６千回です。左の登山ルート図のAで登り、Bで下ることが多かったとおっしゃっています。

【3.陳舜臣さん、山本通の家と登山コース】

『よそ者の目』「旅にしあれば」から抜粋引用します。

私の家は神戸の再度山の麓にあるので、かんたんに山に登れる。毎朝、約一時間半ほど山歩きをするのが、ここ数年来、私の習慣となっている。同好の士も多く登山会をつくって、山の茶店にノートを置き、登山のたびにサインをして、回数の多さを競う。これは戦前からのしきたりだった。

山頂に近い大竜寺境内に『万回碑』というのがあり、登山一万回に達した人の名を石に刻んでいる。一万回といえば、毎日休まずに登っても二十八年はかかる。しかも戦時中は記録がなかったため計算されないので、万回碑に名をつらねた人は、いずれも三十年以上、山に親しんできたことになる。さすがに数はそれほど多くはなく、十人ほどだったと思う。

陳舜臣さんの登山コースは、海外移住と文化の交流センター西の坂から登り、太子の森を抜けるCルートです。

このあたり、次ページで詳述します。

陳舜臣さん、山本通の家と再度山登山コース

【1.陳舜臣さん、山本通の家】

陳舜臣さんの居宅は、北野町のあと、1965年から５年ほど、生田区(現在は中央区)山本通にありました。徳間文庫版『燃える水柱』から抜粋引用します。下線は編集委員の加筆です。

昭和四十二年の梅雨あけのころにも、すさまじ豪雨があった。そのころ私は山本通に住んでいた。坂道をはいった路地にあった家で…。（p.10）

この住所、４丁目72－16（『陳舜臣中国ライブラリー 30』「年譜」p.767）は、現在の地番では４丁目11あたりで、「海外移住と文化の交流センター」の西寄り、細い道を南へ下って数分の所です。

下の画像、路地の奥、突き当たりを右へ折れてすぐの家です。2022年7月編集委員撮影。

左の画像は「直木賞受賞直後　山本通の自宅前」と説明がついています(集英社『WHO is 陳舜臣』)。この家で、『阿片戦争』『青玉獅子香炉』そして、長短編、多くの推理小説が生まれました。

【2.陳舜臣さんの登山コース】

陳舜臣さんの再度山登山については、本通信前号で、『六甲山心中』足立巻一氏「解説」を、そして本号では『燃える水柱』の記述を引用し、かなり詳しく説明しましたので、その箇所は省略します。ただ、次の２箇所について、補足しておきます。どちらも、徳間文庫版『燃える水柱』p.184からの抜粋引用です。下線は編集委員の加筆。

先ず、一つ目。

弘法大師が二度この山に登ったことから、『再度山』と呼ばれるが、その谷川ぞいの道は、市民のちょっとした運動に手ごろなので、毎朝登ってくる人が多い。私も子供のころから、よく父に連れられて登った。幼馴染の山である。

神戸武夷登山会ができたのは1935年4月です。父陳通氏が創立者の一人であったこともあり、陳舜臣さんは、父に連れられてよく一緒に登ったようです。

当時、住まいは、海岸通５丁目の、いわゆる「三色の家」だったので、前頁、再度谷川沿いの登山ルートAを登ったと思われます。かなりの距離です。

それで、山本通に住むようになって、A、Bでは「登り口までが遠いなあ」と思っているときに、次の記述に出会い疑問が解けました。二つ目です。

私はあまり人の通らない道をえらんで行く。
皇太子御成婚記念につくられた散歩道のあるところは、『太子の森』と呼ばれるが、そこは再度山の本通りではない。したがって、ラッシュアワーをはずせば、この道はほとんど人が通らないといってよい。

「太子の森」を通過するとわかり、疑問氷解！

山本通になってからの陳舜臣さんの登山は海外移住と文化の交流センター西の坂がスタート地点です。道なりに登ると追谷墓園へ続きます。この道を、奥再度ドライブウエイのトンネル入口で外れ、太子の森へ向かいます。Cルートだったのです。

再度山登山 補足
傍線は編集委員の加筆

前頁、『よそ者の目』「旅にしあれば」からの引用の続きです。

この登山会は、四月から新年度がはじまる。三月末で一年の登山回数がしめくくられるのだが、ことしの記録では、私は二六〇回登山したことになっている。私は雨が降っても風が吹いても、山にだけは登るのである。どうしても登れないとき、たとえば早朝に約束があった場合などは、午後からでも登ることにしている。しかるに、それが二六〇回だというのは、残りの一〇五日は旅行していたということになるのだ。神戸にいなければ、神戸の山に登れないわけである。（講談社文庫版p.285)(初出は「酒」昭和四十五年六月号)

傍線の箇所、「ことしの記録」の「ことし」とは、一九六九年度？

神戸武夷登山会の「三十週年紀念刊」（一九六九年五月）と「満60周年記念会報」（一九九九年六月）から下の表を作りました。陳舜臣さんの生涯の登山回数です。

期間	1935.4.3－68.3.31	1968.4.1－69.3.31	1969.4.1－1999.3.31	創立～1999.3.31
回数	292	310	427	1029